剣と少年の異世界譚　～Sword is holy or evil～

黒奏雷夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と少年の異世界譚　～Ｓｗｏｒｄ　ｉｓ　ｈｏｌｙ　ｏｒ　ｅｖｉｌ～

【Ｎコード】

Ｎ９３０４Ｖ

【作者名】

黒奏雷夜

【あらすじ】

亜理栖頼（ありすらい）はどこにでも居る普通の学生だった。何事もなく、人生を謳歌する予定だったのに……。通り魔に殺され、目覚めた先は森の中！？　しかも目の前には自分を心配してくれるナイスバディーなお姫様がっ！　しかも手には何の因果か、『王剣アルファセウス』なる伝説の剣が握られていた。アリスと名乗ることを決め、モンスターと剣と魔法の世界で生きていくしか方法がない少年は自らの運命を受け入れ、前へと進む。異世界転生モノですが、主人公

最強ではありません。三人称と一人称を使い分けていくと思いますので、お見苦しい所などもあるかとおもいますが、温かい目で見守って下さい。ご意見やご感想、誤字脱字のご報告や疑問点なども、どんどん宜しくお願いします！

序話（前書き）

お初にお目にかかります、黒奏雷夜です。
小説初心者ゆえ、未熟な点などもあるかと思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

序話

友人曰く、
「アイツは普通のいい奴だった」
と口を揃える。
『アイツ』とは、ここのところのニュースを独占している事件の被害者だ。
名は、亜理栖頼（ありすらい）。公立高校に通う、成績は普通で特に際立った特徴もない、普通の高校一年生の男子生徒。
『事件』とは、連続通り魔事件だ。
現代社会に有り触れた猟奇的な犯行手口で、お茶の間を一昨日程まで賑やかせていた。被害者は合計六人。男女の内訳は男性一人、女性が五人だ。
しかし、この一連の騒動での死者は一人。
それが、亜理栖頼という少年だった。
犯人はといえば、既に殺人・殺人未遂・強盗・傷害の容疑で検挙されている。よって、云わばこれは解決済みの事件であった。
何（いず）れ、この唯一死亡した被害者の少年の名も忘れられるだろう。
それ程に、人の死に関しての関心は薄いと言える。何故なら、「また今日も何処かで誰かが死んだ」という認識しかないからだ。
結局は自分のことではないから興味は無い、という事実しかない。
現実問題、それは紛れも無い真実であり事実。この少年も、事件に巻き込まれた不幸な少年として名前が多少残るだけだ。
たったそれだけの、小さな出来事。
ただし、巻き込まれたこの不幸な少年の物語は終わってなどいなかった。
寧ろ、『始まり』であったと断言出来よう。

これは終わりから始まる物語。

亜理栖頼が最初に感じた感覚は激痛と熱だった。
所属していたサッカー部の部活を終え、校門を潜った時刻は既に七時を回っていた。頼の自宅は学校から徒歩で三十分程の住宅地にある。別段、遠い訳ではないのだが、流石に部活を終えた後の身体にはキツいというものだ。
最近、通り魔事件も多発している訳だし嫌だな、と短絡的な思考を巡らしていた頼。
その時、背中に衝撃が走ったのだ。
「――――ッぁ！？」
声にもならない悲鳴を漏らす頼が見たものは、自分の背中から突き刺さり、腹部を突き破って、その先端を見せている大型の刃物だった。
「な……んだよ」
答える声はない。
ズブリ、と生々しい感触と音が内臓から直に伝わり、傷口からは血液が溢れ出す。
「あ……ぅぅ……――――」
陽が完全に落ちた冷たい路面に、頼は倒れる。地溜りは止め処なく広がっていくばかりだ。
「ち、くしょう……！　なんで、なんで俺が……」
頼は直感で自分が通り魔に襲われたのだと理解していた。
でも、今までの被害者は全員、女性だった筈だ。なのに――――。
「なんで俺が……、こんな目に……」
少年は最期の力を振り絞り、手を伸ばした。
掴めるものなど何もないのに、確実に彼の腕は、手は何かを掴もうとしていた。

死にたくない。
こんな所で、こんな事で、終わりたくない。
嫌だッッッ！！！

（嫌だァァァあああああああああああああアッ！！！）

少年は闇へと落ちる感覚だけを覚えた。
この先、どんなに辛いことがあってもいいから生きていたい、と云うささやかな願いのみを心に残した少年。
それは、生と死を少年が初めて実感した瞬間だった。

序話（後書き）

序話ではまだ、異世界って感じがしませんね。これから、異世界での話に切り替わっていきますので、ご意見ご感想など何でもどうぞ！

1話　亡国の王女（前書き）

早くもお気に入り登録ありがとう御座います。超感謝です！！

1話　亡国の王女

この景色は何時も私を癒してくれる。
仕えるべき国を失い、家族も亡くし、空っぽになった私はここに逃げてきた。その日から、私は毎日のようにこの景色を見続けている。
周囲を広葉樹に囲まれた小さな湖なのだが、決して強く自己主張もせずに悠久の時間を経てきた。
そんな湖が、私は好きだった。
この美しい景色を見ていると、遥か昔に家族と過ごした屋敷の庭園が思い出される。花が咲き乱れ、蝶の飛び交うあの庭園を。
しかし、国王の暗殺によって、王族内での内部抗争が勃発。同時に国内では諸侯や農民による反乱までもが相次いだ。内部で争っていた王政府は、数少ない政府直属軍までもを疲弊させてしまっていたため、最早鎮圧など夢物語。
最初の反乱発生からたった三ヶ月で、王都スペルシアは陥落。
当時、農民反乱軍――自称『救世軍（メシア）』のトップであり、地方豪族だったカリストロ・ヴェンジェルディンは自ら王を呼称し、王都周辺を自領としてヴェンジェルディン王国を建国。同時に農民兵による正規軍を結成し、外国から傭兵を次々と雇い入れ、軍備の拡張を図った。
この策が功を奏し、少なくとも自領の完全な支配権を手に入れることには成功した。
しかし、カリオストロ・ヴェンジェルディンが創り上げた王国などに従う各地の諸侯は存在しなかった。
各地の諸侯は互いの領土拡大を狙い、互いに争い始めた。最早、『国』という言葉の定義は当てはまらないほどに王国は混乱に陥った。

失われた最強の聖装『王剣アルファセウス』の遣い手は、未だ現れず。

「――何考えてるのかしら……昔の事じゃない」

私は思考を中断して呟いた。

『王剣アルファセウス』が失われたのは何百年も昔の話だ。

王国の危機が訪れたとき、その姿を現すという聖装。王の直系のみが扱えると言う最強の聖装。危機の回避とともにまた姿を晦ますという聖装。

もちろん私はこんな胡散臭い伝説なんて信じていない。

ただ……、伝説に頼ってでも、希望を持ちたかっただけなのだ。

「もう、帰りましょう。嘆いていても仕様がないもの」

私は午後の日差しを受けて、硝子細工のように輝く湖面に背を向け、湖畔から離れていった。

帰りの乗り物は茂みの中に待たせている。早く戻らないと、痺れを切らして機嫌を損ねるのだ。

私が足を動かす速度を速めようとした時、

ガサッ！　と草が擦れ合う音で私は足を反射的に止めてしまった。

「???」

私は首を傾げた。

この周辺にはあんな大きな音を立てる動物は居ない筈、というのが私の実直な感想だ。

「もしもし？　誰かいらっしゃって？」

私は迷うことなく、茂みを掻き分けて音源へと近づいた。返事は無いが、気配は確かにする。もしかしたら行き倒れている旅人かも知れない。

茂みの向こうに……、人が倒れていた。

「あ」

それは少年だ。
見慣れぬ衣服に身を包み、自分とは異なった顔立ちの少年。そしてその右手には一本の剣が握られていた。
「しっ、しっかりして下さい！！」
私は事の重大さを理解し、駆け寄るという選択肢を取った。
明確な理由は無いが、この少年を助けなくては、という衝動に駆られたのだ。
思えば、これも運命だったのだろう。

「……じょ……すか…！　……ぶですか！！」
呼んでいる。誰かが俺を？
俺はまだ覚醒しきっていない意識で考える。手足は多少動くが、立ち上がるなど論外だ。
ひとまず、自分の状況を俺は確認する。まず、寝転がっていることは感覚的に掴める。そして誰かが俺の肩を軽く揺さぶっていることも。
次に俺は目を開くことを試みた。別に眠いわけでもないのに、瞼は重い。恐らく金縛りに遭った状態に近いのだろう。
しかしだからといって、ここで動かなかったらなんだか俺を呼んでくれる人に悪い気がするので、まずは目を開けたい。
全神経を目に集中させ、瞼をこじ開ける。漸く開き始めた目に、今度は眩いばかりの閃光が飛び込んできた。
「ま、眩しっ！！」
俺は目を思い切り閉じた。
だが、その衝撃が身体を動かす起爆剤となったのか、俺の身体はある程度の自由を取り戻せた。同時になぜか噎せ返った。
「げぅふっ！！　ごほっ！！」
「ひゃっ！？　ホントに大丈夫ですか！？　息はあるみたいですけ

ど！！」
ともかく返答しないと。
「あ……大丈夫だいじょーぶ。ちょっと眩しかっただけですのでご心配なく」
俺はとりあえず相手を心配させないように、なるべくライトな口調で返答した。
「そ、そうですか？　なら宜しいのですが……」
已然、声の主は心配そうだ。そういえば、女性だということにも気づく。
俺は声の主を確認しようと、目を開けることにした。光に慣れてくれればいいが、目を開けないことには始まらないので、俺はゆっくりと瞳で世界を見ることにした。
きっと俺を心配してくれる美少女の顔が拝めるはず――――、って！？　うおわっ！？
俺が目を開けて、一番に飛び込んできたのは光景は、清々しい林の光景でもなければ、少女の顔でもない。
何故だろう？　少女の顔よりも先に、ワンピースを押し上げる形の良い胸が確認できた。
「何で何で！？　俺はそこまで性欲に塗れたヲトコノコじゃないですけどっ！？　女の子の顔よりも胸に視線が行ってしまうなんて嘘だッッッ！！」
俺は絶叫し、目を両手で覆った。そのまま勢いで後頭部をガンガンと地面に打ち付ける。
「あ、あのぉ……いろいろと大丈夫でしょうか？」
早口でまくしたてた為、俺の言葉の意味までは通じていなかったようだが、かなり不審そうな目でこちらを見ている。
俺は両手を目から外し、今度はちゃんと少女の顔を確認した。
今度は別の意味で息を呑んでしまった。
俺を介抱しようとしてくれていた少女は、薄緑のワンピースに茶色のガウンを羽織っていたが、重要なのは端正な顔立ちだ。ストレ

ートな金のブロンドのロングヘアーに、透きとおるようなサファイアの瞳。
まさに妖精を具現化したような美少女だった。
そして形の取れた胸。形の取れた胸。大事なことだから二回言ったよ？
そして不覚にも、俺の鼻穴からドロリとした熱を帯びた液体が垂れたのが分かった。
俺は変態じゃないからなっ！！

1話　亡国の王女（後書き）

サブタイトルに反して、内容は後半ぶっ飛んでます。
重ねて言いますが、主人公は変態じゃありません！
ただ、時々魔が差してしまうんですね……。

2話　異世界（前書き）

お気に入り登録、ありがとう御座います！
これからも読者の方を満足させられるよう、精進していきますので
よろしくお願いいたします。

2話　異世界

俺は今、程よい温度の水で顔を洗浄中だ。
不覚にも興奮して鼻血を出してしまった俺は、超絶美少女に案内されるがままにこの湖に案内されて、顔を洗うことを勧められたのだ。
まあ、幸か不幸か、水で顔を洗っているうちに意識もかなり覚醒して、今では身体も目立って不自由な部分はない。
「ハンカチ、使いますか？」
後ろから例の少女が俺を気遣って、声を掛けた。俺も受け取らない理由はない。
「あ、お願いします」
水から顔を上げた俺は、少女の顔を見ながらハンカチを受け取った。決して、視線を下に移してはいけない。いいか、絶対だぞ。
受け取って、顔の水滴を拭ってみて分かったことだが、どうやら上質な絹で出来ているようだ。肌触りがサラサラで全く不快感を感じない。
顔も拭き終わり、俺は少女にハンカチを手渡した。
少女はハンカチをガウンの内ポケットにしまい、代わりに一本の剣を俺に差し出してきた。
「これ。あなたのですよ。お返ししますね」
俺は一瞬だが、戸惑う。
俺は剣なんて持っていた記憶はない。
確か、部活の帰りに、校門の前で通り魔に刺されて意識を失って……。
――絶対に死にたくないと思った。
もちろん、今の俺の服装は刺された時と同じ、ワイシャツと黒のズボンという一般的な県立高校の夏服だ。特に勇者のような特別な

格好をしているわけでもなく、当然、この森の中に倒れていた経緯も不明である。
しかし、少女は何の屈託もない笑顔で剣を差し出してくる。俺も受け取らないわけにはいかないじゃないか。
その剣は白い鞘に納まっていて、見えている柄の部分だけ見ても変わったデザインだと分かる。
「これ……俺の？」
「はい。倒れているときもしっかりと握っていましたよ。余程、大切な剣なんですね」
「……」
俺は黙って、剣に手を伸ばした。心なしか、手が震えてる気がした。両手で鞘の部分を掴み、自分へと引き寄せる。
白い鞘の部分の感触は昔に行ったことのある高級レストランで床の建材に使用されていた大理石に似ている。しかし、それにしてはあまりにも軽すぎる。
もちろん剣の重みもあまり感じない。
俺は恐る恐る柄に手を掛けた。

瞬間――――、バチン！　と火花が散ったかのような音と衝撃が俺の手に伝わった。

しかし、俺は剣から手を離すというアクションを起こすことは出来なかった。
何故なら伝わってきた衝撃は、剣が俺を拒むような反発の衝撃ではなかったからだ。むしろ、俺の感覚器官に強制的にこの剣のプラグを挿入されたような、外から内への衝撃だった。
「――――――――ッ！？」
だが、それは俺を混乱させるには十分だった。
頭が俺とは違う別の意識に乗っ取られた、というよりは流れ込んできたという表現の方が正しいだろう。

だが、それもほんの数秒の事。
数秒後の俺は、俺であり俺でなかった。
「その剣は？」
少女の鈴の音のような澄んだ声が俺の鼓膜を刺激し、脳へと情報を伝える。
俺の返答に戸惑いなどは無い。
「これは、『王剣アルファセウス』だ」
「ッ！？」
少女が息を呑む。
俺はなんとも不思議な気持ちに陥っていた。
この剣について俺は何も知らない。なのに、俺はこの剣の名前を知っていた。知識としてではなく、感覚として知覚していた。
「……で、王剣アルファセウスって何？」
だがしかし！
俺が知っているのは名前だけであって、概要や役割、意味などはさっぱり不明だ。
例えるなら、この最新機器の名前は知っているが構造、使用方法が分からないと云ったところだ。
少女は剣の名前を聞いて、酷く驚いていたことから何か重要な意味を持つこと位は理解できるのだが……。
「あなた……今、『王剣アルファセウス』と言いましたか……？」
「ああ、はい。確かに言いましたけど……、俺にも何で名前が分かったのかよく分からなくて」
「何で……？　その剣は……だって……――いいえ、今はいいです。とにかく、あなたはどうやってその剣を？」
そんなこと聞かれても、正直困る。
俺だって、剣以外のことも、どうして自分がここに居るのかすら分からないのだから。
「分からないんです。なんで、ここに居るのかも」
正直に答えるしかなかった。

「それって、記憶喪失というヤツですか……？」
「そうわけじゃなくてですね。覚えてはいるんですよ、俺が誰かということも昨日の夕飯も……。気づいたらここで寝ていたという感じなんです」
自分が殺されたということも、はっきりと覚えている。あの痛みも、あの気持ちも。これだけは忘れたいのだが……。
「とりあえず、説明してくれると有り難いです」
俺が笑顔で言うと、少女はまじまじと剣を見つめ、
「それはいいんですけど……、」
歯切れの悪そうな顔をして考え込んでいる。
なんだか、とても真剣だ。もしかして、この剣ってなんか拙いものだったのか？
「と、とにかくですね。私の家に来ませんか？　行く当てもないのでしょ？」
「うっ」
図星だよっ！
なんだか自分が惨めになってくる。俺の脳内では、『宿無し』『ホームレス』『駄目人間』という言葉が渦巻き始めた。
それに……それに女の子の家に行くなんて緊張するではないかっ！
俺だって純粋（ピュア）無垢なチェリーボーイなんだぞ！
「よろしく、お願いしますっ！！」
でも、ここで少女と別れてしまったら、きっととても不安な気分になって恐怖に押しつぶされてしまうだろう。
悪いが今日はお世話になろうではないか。
それよりも問題は、俺の理性という脆いモノが、超が付く美少女と一つ屋根の下というこの状況に耐え切れるかどうかということだ。
不安な一夜になりそうだ。

少女が言うには、乗り物を待たせてあるからそこまで歩いていくらしい。急ぎ足なのは、待たされると乗り物は機嫌を損ねてしまうらしい。

馬か何かだとは思うが……。

「ところで。まだ、君の名前を聞いてないんですけど、差し支えなかったら教えてほしいです」

無言で森の中を歩くのも寂しいものなので、俺から会話を切り出すことにしたのだ。

「わたしですか？　えー、リコです」

「リコ……何？」

「リコはリコですよ」

「じゃなくって、苗字はないんですか？」

俺の言葉を聞いて、少女改めリコは驚いたような表情を見せた。

「苗字なんてものを貰えるのは、上流階級の方だけですよ。私のような平民になんてとても……」

なぜか少女の顔には悲しみのようなものが浮かんでいた。その理由は分からない。

それよりも今の会話で気になったのは、上流階級や平民という言葉だ。平民が苗字を持っていないなんて、何時の時代だ？

「ここは何処なんですか？　国名とか地名がありますよね？」

「もしかして、この大陸の出身じゃないんですか？　人間ですし、ディスニアの生まれだと思っていたんですが」

「ディスニア？　それがこの国の名前ですか？」

「いえ。ディスニアは私たちの王国が……まあ、今はもう無いんですけど、とにかくこの大陸の名前です」

「王国なんてあったんですか！？」

「ええ」

淡白な答えに、俺の嫌な予想が当たったことを確信する。

間違いなく、俺は異世界に来てしまったのだ。

自分の世界で殺された俺は、この世界でやり直せって事？

異世界転生なんて、ホントにあったんだぁー。
「そういえば、あなたの名前も聞いていません。教えてくださいませんか？」
打ちひしがれて、呆然と歩いていた俺に少女が声を掛けてきた。
「えっと。俺は亜理栖、頼です」
「アリス……、ライですか？　男性なのにアリスなんですか？」
亜理栖は苗字なんだが、まあアリスの方が親しみやすいってんなら、アリスでもいい気がする。なんか、可愛いしな。
「じゃ、アリスって呼んでください」
俺はアリス。少女はリコ。これで定着しそうだな。
俺とリコは少し広めの空き地にたどり着いた。リコは辺りをキョロキョロと見回し、乗り物を探しているらしい。
「おーい！　ユニー！　出てきてよー！」
ユニー。それが乗り物の名前なのか。
その呼び声に応えるように、茂みがガサガサと音を発した。気配がこちらに近づいてくる。
「ええーっ！？」
俺は茂みの中から飛び出してきた生物を見て、その声を発さずには居られなかった。
茂みから姿を現した、純白の馬のような生物。しかし大きさは馬の二倍ほどで、背中には童謡の天使の如き、白銀の翼を生やしている。

その生き物は紛れも無い天馬（ペガサス）である。

「ちょっと！？　ペガサスだよ！？　俺、初めて見た！！」
「もしかして見るのは初めて？　生息しているところには居るものなんですけどね」
「はあ……」
俺に解説をしながらも、リコは手馴れた動作でペガサスへと跨っ

た。そして、俺に手を伸ばす。
「さ、乗ってください。村までひとっ飛びです」
俺はリコの小さな腕を掴み、ペガサスへとよじ登った。背中は牧場で乗ったことがある、ポニーの感触に似ていた。
初めて乗る大型獣がペガサスってレアじゃない？
だが、これでここが異世界であるということが証明されてしまった。何が起こるかわからないこの先のことを考えると、俺は多少だが不安を覚えた。

2話　異世界（後書き）

異世界に来てしまったアリス！
これから少年は選択を迫られるのです。

3話　リコの家（前書き）

今回の話はもともと一話だったのを二話に分けさせていただきました。続きは出来れば明日にでも投稿できればなあ、と思います。

3話　リコの家

最初はペガサスなんてどんなに危険なんだろう、とか思っていた俺だが、いざ飛行してみれば大したことは無い。飛行機のような耳障りなエンジン音もなく、気になるのは飛行とペガサスの羽ばたきによる空気抵抗のみだ。

「うわー……、大自然ってすげーな」

俺はペガサスの背から見える絶景を目に、感想を漏らす。

俺の目の前に広がる光景とは、鬱蒼とした森林とその先にある大山脈だ。その光景は、俺の世界でいうアルプス山脈や北欧の針葉樹林をイメージさせる。対比を為すように、標高の低い土地には広葉樹林が広がっている。どうやら、この世界はかなり自然が豊からしい。

「もしかして、アリスさんの故郷は砂漠地方ですか？」

リコが俺の感想を聞いた推測だが、見事に外れている。俺は異世界から来たんだもん。

「そういう訳ではないですけど……、ってどうしました？」

気づけば、リコは俺の唇に人差し指を当てていた。

少女の柔らかい指先の感触に、俺の胸が熱くなる。

「わたしに敬語は要りません。落ち着かないじゃないですか」

こっちはその仕草が一々可愛すぎて落ち着きませんっ！！

俺は心中を、心中で吐露する。

だがまあ、俺も敬語使われたら落ち着かないってのは一理あると思うので、ここは受領するのが好感度アップに繋がるんじゃね？

「じゃあ……、リコ……？」

「はいっ！」

ヤバイ。これは本当に一つ屋根の下なんて状況はヤバイかもしれない。押し倒したいと言うよりは、抱き締めたいという欲望の方が

強い。
　つまりは、俺は色香たっぷりのお姉さん系よりも、可愛らしくて素直で健気で保護欲をそそられる相手が好みということなのか？
　異世界に来て、初めての発見がこれだとは……、なんとも絶妙な気分だ。
「じゃ、俺のこともアリスって呼んでくれる？」
　結局、俺はリコと対等な立場がいいと思ったので、彼女と同じ提案をしてみることにした。
　リコも嬉しそうに頷いて、
「アリス。でいいですか？」
「あれ？　敬語は変わんないんだ」
「はい。デフォルトです」
　……なんだか異世界の人間と話してる気がしない。
　これはあくまで俺の予想だが、この世界の人間と言葉が通じるのは、頭の中で自動翻訳されているからではないのだろうか。だから、俺が日本語で話しても意味が通じるのだろう。異世界語は脳内で日本語に翻訳され、日本語は異世界語に変換され――といった具合だ。
　つーか、仲良く話してる俺たちをペガサスのユニーが神妙な面持ちで見つめているのは何故だろう。なにか、機嫌を損ねるようなことをした記憶はないが……。
　俺がユニーと睨めっこを続けていると、不意にリコの声が響いた。
「あっ、到着ですよ、アリス。しっかりと掴まってください」
「了解！」
　リコがユニーの耳元で何かを呟き、ユニーは了承したかのようにコクンと頷いた。
　ユニーはヘリのホバリングのように空中で羽ばたきながら、垂直に降下していく。俺はペガサスという生物の機動性の高さを今一度認識した。
　ユニーが着陸したのは、林の中に建っているこじんまりとした平屋建ての民家の正面。

どうやらここがリコの家らしい。
家の周りは白い石で作られた花壇に囲まれていた。花壇には色とりどりの花が咲き乱れていて、蝶が数匹飛んでいる。リコ曰く、この花も収入になっているらしい。更に、家の裏庭には畑もあるらしい。
「リコはどんな仕事をしてる訳？」
俺は綺麗に整えられた庭を眺めながら、尋ねた。
リコはユニーの毛づくろいをしている最中だが、快く質問に答えてくれた。
「普段は、薬草を裏の畑で採ったり、今日みたいに森に出かけて採取したりしてます。滋養薬や湿布を作って、村で売るのが主な収入源になってますね。後は花を摘んで、花束を作ったりもしてますよ。これは季節限定ですけど、一応商売としては成り立つので」
それって凄くない？
この年齢で（実際、年齢は聞いていないが恐らく俺と同年代だと思う）生計を立てて生活しているなんて凄いことだと思う。最近の働く意欲がない若者にも是非、見習ってもらいたい女の子だな。
俺が感心している内に、リコはユニーの毛づくろいを終えてしまったらしい。最後にガウンの左ポケットに手を入れ、黒い丸薬？のようなものを取り出し、ユニーに与えた。ユニーもそれを美味しそうに飲み込み、一声嘶（いなな）く。
「よしよし。じゃあ、またお世話になるね」
リコはユニーの頭を撫でると、軽く身体を叩いた。それを合図にして、ユニーは林の中へと駆けていった。
「あれ？　飼ってたんじゃなかったの？」
「あ、はい。出かける時だけ呼んでます。あの子も野生動物ですから、縄で繋がれるのは嫌だと思うんです」
なるほど。だから蹄鉄や手綱も付けてなかった訳か。
それよりも本当にリコは心優しいんだな。
ユニーを見送った後、リコは玄関へと向かい、ポストのような木

の箱の中を確認した。特に何も入ってなかったらしく、そのまま閉じて玄関のドアノブへと手を掛けた。
玄関の扉を開けると、チリンチリンという鈴の音に近いものが響き渡った。
リコは着ていたガウンを脱ぎ、それを玄関の内側へと掛けた。部屋の中ではワンピースだけになるのか……、ゴクリ。
おっといけない。精神統一だ。
気分が落ち着いたところで、俺は屋内へと足を踏み入れた。
この家には一部屋しかないらしく、十二畳程の部屋に台所と長テーブル。そして奥にはベッドがひとつある。部屋の左に扉がひとつあるが、それは物置のようだ。
「トイレとかって何処にあるんだ？」
「トイレは外です。屋内はスペースがなくて……」
ちょっと恥ずかしそうにリコが俯いた。
トイレが外にある。露出プr……げふん、ごほん！
俺は緊張のあまり、思考が異常と評してもいいほどにアッチ方面にずれていた。初めて女の子の家に行ったんだから、しょうがないだろ？
「それじゃあ、座ってくださいな。今、お茶を出しますから、それから話しましょう」
最後の一文には力が込められていた。
一体、『王剣アルファセウス』とは何のことなのだろうか？　漸く、それが明らかになる。

3話　リコの家（後書き）

ヤンデレな妹が出てこないっ！
出てくるのはしばらく後になります。暫くはリコちゃんとアリス視点で物語が続きます。

4話　魔法の定義（前書き）

今度こそ、王剣やその他の核心部分の話をする予定だったのですが、どうしても入れたい話があり、変更となりました。
次回こそは、次回こそは絶対にやります。

4話　魔法の定義

俺を席に座らせると、リコは台所へと向かった。
台所には、俺の家のコンロと同じような形状のものがあるようだが、仕組みは全く違うらしく、リコはコンロの下の鉄板を開けて、中に薪などをくべ始めた。このように下で薪を燃やすと、上のコンロで料理が出来るわけだ。
「手伝おうか？」
俺はリコに全部をやらせるのは流石に悪いだろうと思い、席を立ち上がった。
「いえ、大丈夫。何時も、一人でやってますから」
苦労してるんだな……、と俺は足を止め、少女の背を見つめた。
その背中はとても小さい。まだ、幼さの残る少女の背中だ。とても自分で生計を立てたり、自分で仕事が十分に出来る程の体力がないのは一目瞭然だ。それでも……。
（何でだろうな？　俺には、リコの背中がとっても大きく見える……）
先ほどまでの疚しい感情はどこかに消え失せ、今はともかくこの少女の負担を少しでも減らしてあげたいと、切に思った。
もし、元の世界に帰れないのなら。本当にもしもの話だが、リコの傍で笑っていられれば、楽しいかもしれない。
俺は静かに歩み寄り、薪を一生懸命にくべるリコの手に自分の手を重ねた。
「え？　アリ、ス……？」
「無理するなよ。今は俺が居るんだから、俺に仕事を押し付けてくれ。ほら、俺だってタダ飯食うだけじゃ悪いと思ってんだよ。だから、な？」
そして俺はリコの手に直に触れて、理解したことがある。

リコの手は皸(あかぎれ)が多々、あった。
ここだって、今は温暖だが一年中そうじゃないはずだ。しかし、洗濯物や洗い物は冬だからといって、サボることは出来ないのだ。
「そりゃ、毎日外で洗ってりゃあ、こうなるだろ……」
俺は半ば、呆れたような声で。でも、精一杯の労りを込めて、呟いた。
「湿布とか作ってんだろ？　なんで、自分には薬、使わないんだよ？　放っとけば酷くなるってのに……」
「別に……このくらいわたしは……」
リコはあまりはっりと口に出さなかった。
きっと、それは俺の言うことがもっともだから、反論できないのだろう。
「そうやって、大丈夫大丈夫って。全然、大丈夫じゃねえって。ほら、俺がやるから」
俺はリコを半ば強引に押しのけて、残った薪をくべる。
確かに俺はここに来たばかりで、まだ何も分からない。でも、手をこんなにして働いている少女を放っては置けないのだ。
「リコ、火ってどうやって点けてるんだ？」
粗方、薪を釜にくべた俺はリコに尋ねた。
この世界では、火をどうやって点けているのか、俺は知る由もないので、こればかりはリコに頼るしかないのだ。
リコは俺の問いに、ワンピースの裾を突然捲り上げた――――ってうぉおおおい！！　なにやってるんすかぁぁああ！？
揺さぶられる俺の心中などお構いなしに、リコは太腿に巻きつけていたベルトのような物から、一本の木の棒を取り出した。表面だけ見れば、中々手の込んだつくりになっているではないか。まさか、こんな上質なものがマッチではないだろう。
「火はこれで点けます。これはわたしがやるので、任せてください」
「お？　ああ、うん」
俺は了承した。

これくらいなら、別に疲れるわけでもないし、何よりもこの木の棒でどうやって火を点けるのか、とっても気になる。
色んな方法を思い浮かべる俺の目の前で、リコは木の棒を人差し指と親指で挟むように持ち、目を閉じた。
突如、木の棒が発火した――というよりは、木の棒の先端から数ミリ程離れた空中で火が燃えているという感じだ。
「これ、どんな仕組みだ？　もしかして次世代ライター？」
「？？？　”らいたー”がどんなものか知りませんけど、これはただ単にクレミアの木を加工したものに、『発火（イグナイト）』の術式を埋め込んだものですよ。これに魔力を流し込むだけで、術式が発動するようになっています」
「ゴメン。全然、理解できないよ。つまり、リコは魔法を使ったってこと？」
「う～ん、正確には魔法ではありません。でも、違いを説明するとなると、定義から入らないと駄目ですし……」
リコは少し考え込んだ後、俺を見て、
「まず、魔法の定義から説明しますね。魔法の定義とは、術式を構築して魔力を流し込んで、それが現実に干渉するようになることです。この定義から考えれば、わたしが先ほど行ったのは、予め術式が棒に付与（エンチャント）されていたので、正確には魔法を使用したとは言えませんよ」
「その術式ってのは？」
「はい。術式というのは、魔法を発動するために必要な情報が記入されたメモ帳だと思ってください。それを学んで、正確に覚える事が出来て初めて術式を身に着けることができた、と言えます」
説明を聞いて、俺は適当に相槌を打つ。
「へえ。まあ、魔法でも何でも要は勉強しないと使えないって訳ね」
「まあ、そうです。でも、魔力は誰にでもあるんですよ？　大事なのは術式を覚えることですから。きっとアリスでも、魔装具くらいなら直ぐに扱えるはずですけど……」

「魔装具っていうのは、さっきの棒とか？」
俺の指摘に、リコは頷いた。
「はい。他にもいろいろとありますけど、家に置いてあるのは『炎（ファイア・ブロッサム）の枝』と『竜巻箒（トルネード・ブルーム）』くらいです」
なるほどね。魔法を予め仕込んであるアイテムなら、誰にでも使えるのか。元の世界に……帰れるのかは分からないが、帰れるときは魔装具のひとつくらい持って帰りたいものだ。
しかし、それよりも今はこの場で使ってみたい。どうやら、扱いは俺にでも出来るようだ。
「なあ、俺にやらせてよ。ちょっと使ってみたいんだ」
「いいですよ。きっと、アリスなら出来ます」
何だよ、褒められると照れるじゃないか。よぉし！　やってやる！
俺はリコから『炎（ファイア・ブロッサム）の枝』を受け取り、先ほどリコがやったのと同じように人差し指と親指で挟むように持つ。これで後は、魔力を流し込むだけらしい。
（よっし。魔力を流し込むぞ）
俺は腕に力を込め、魔力を流し込もうとした――のだが。そもそも魔力が何か分からない。
「リコ、魔力ってどうやって流し込むんだ？」
「え？　ほら、体内に魔力が通っていますよね。それを指から杖へと流し込むんですよ」
あー、そういうことか。
きっと、幼い頃から魔法ないし魔装具を使用してきたリコには、魔力の流れというものが分かるのだろう。だが、俺は魔法はもちろん、魔装具だって使用経験がないのだ。いきなり魔力なんて言われても、分かるわけが無い。
「リコ？　俺さ、こういうこと初めてだから、魔力がどういうものか分からないんだ。きっと、俺の身体を今も流れてるんだろうけど、正直な話、その感覚が分からない。どうにかして、教えられないか？」

無茶な要求だとは分かっていた。
人の身体に物を教えるなんて、それこそ脳に人工的に書き込まないと駄目だ。そして、どうみてもこの世界に、他人に頭に自分の感覚を伝える技術なんて存在しないだろう。俺の時代にだってないのに。
しかしリコは、
「分かりました！　わたしの魔力をアリスにこれから流します。そうすれば、アリスも魔力がどんなものか分かるはずですよ」
「おお！！　なるほど！　確かにそうかも」
「えへへ。では、早速流しますね」
リコは俺に近づき、俺の手を握った。
また俺の心臓（ハート）の鼓動（ビート）が激しくなる。
「行きます」
リコは短く呟き、目を閉じた。
その瞬間、俺に魔力が流れ込んできた。
それは、とても不思議な感覚で、リコから流れ込んできた魔力が俺に伝わると、俺の体内の魔力が”認知”できるようになった。
例えるなら、今まで知らずに食べてきた物の名前を教えられ、味と名前が一致し、自分の中でパズルが組み立てられたような感覚。
それは少し恐ろしくて。
少し安心できた。
リコの魔力はとても優しくて暖かい。俺の身体の隅々まで行き渡り、俺を目覚めさせた。感覚と肉体を覚醒させたのだ。
「もう、大丈夫ですか？」
「ああ。分かった。これが魔力か」
リコが俺の返事を聞いて、ゆっくりと手を離した。
俺は先ほど、『王剣アルファセウス』を握った後と、非常に近い感覚を味わっていた。自分の中に未知の力が、感覚が染み渡った――そんな感覚だった。
俺はもう一度、杖を握り締めた。

「行くぞ」
俺は身体の中で躍動を繰り返す流れを腕から指へ、指から杖に仕込まれた術式へと変更する。魔力の流れが術式を構成する”何か”と結びついた瞬間、術式の情報が脳内に流れ込んできた。
簡単な仕組みだった。
俺は戸惑うことなく、魔力を流し続けた。だが、流しすぎはよくなかった。
「ぬおぉあっ！！」
火、というよりは、炎が杖の先端から噴出した。
「ア、アリス！　魔力を抑えて！」
俺はどうにか術式を制御しようと、魔力の流れを少し狭めた。それに比例して、炎も弱まってくる。
「今です。早く点火してくださいね」
「お、おお」
そういえば、目的はそれだったな。
俺は黙って頷き、薪へと火を点けた。火は直ぐに燃え移り、温度を上げていく。
「じゃあ、閉めるぞ」
俺は点火したことを確認し、金属の蓋を閉めた。
リコはというと、早速水を入れたやかんのようなものをコンロに乗せていた。
「これからお茶を作りますので、今度こそ座っていてくださいね」
「うん、分かってる」
リコは俺が頷いたの見て、
「これからお話します。アリスが知りたいことを」
目の前の少女の顔は、今までとは打って変わって真剣なものだった。

4話　魔法の定義（後書き）

一応、魔法というものを簡単に書いてみたのですが、お分かりいただけたでしょうか？
不明な点などがあれば、後々追記していきたいと思います。自分的には、なるべく説明回だな、とならないようにしたんですけどね……。

5話　決断、そして（前書き）

学校という忌まわしい宿敵から送られてきた、宿題という最凶の刺客との死闘を終え、なんとか投稿できた作者で御座います。
なんとか、平和になったので今後はペースアップが出来ますので、よろしくお願いします。

5話　決断、そして

俺は今、リコの家で唯一のテーブルに備え付けられていた椅子に腰掛け、リコを待っていた。
俺が望む話をこれからするというリコは、長い話になる前にと、お茶を入れてくれるらしい。ここからでも台所に立って、お湯をカップに注ぐリコの後姿が見える。
（俺が望む話、か……）
一体、それは何なのだろう。
王剣についても気になる。リコの真剣な表情から察するに、何かこの剣には意味があるらしい。
俺は足元に置かれていた剣を手で拾い上げる。剣と呼ぶには軽く、ただの棒と呼ぶにはあまりに精巧すぎる。そして何よりも、俺が先ほど感じた流れ――。
そう、魔力。
魔力の流れを、俺はこの剣の中に感じる。
俺の中にあったそれよりも遥かに強大な魔力を。これがただの骨董品ではないことは既に決定的。しかし、じゃあ一体何なのか？
という質問に、俺は答えることが出来ない。
リコは知っている様だが……。
俺が思考を脳の隅々まで駆け巡らせていると、リコがお盆を持ってこちらへと向かってきた。お盆の上には、二つのカップと陶器の皿。
「お茶、お持ちしました。宜しかったら、こちらの方も如何ですか？　これ、直ぐそこの森で採れたものなんです」
リコは笑顔で解説し、お盆をテーブルの中央へと置く。
「おおっ！！」
お盆上の陶器皿には、ピーナッツや胡桃に似た木の実が山盛りに

なっていた。何よりも、懐かしく感じる。向こうの世界では、胡桃やピーナッツが大好きだったのだ。
そして忘れてはいけないのがもうひとつ。
それが、湯気を立てているお茶だ。
「このお茶は菜園で取れた薬草を調合、乾燥させて作った特製です。村でも、時々皆さんにご馳走したりしてますので、味は保障できますよ」
どうやら自信満々だ。
まあ、その言葉の通り、お茶からはいい香りが漂ってくる。
「それじゃ、頂きます」
俺はカップを手に取り、口へと運んだ。
熱いことは分かりきっているので、飲み干すような真似はしない。俺はギャグマンガの主人公じゃないんだぜ。
口内を火傷しないよう、俺はカップのお茶をゆっくりと口に含んだ。
「お、甘いね。なんか、味にも含みがあって美味しい」
「ホントですか！？　嬉しいです！」
リコは俺のリアクションにご満悦のご様子。
実際、俺のはお世辞じゃなくて正直な感想だ。
俺の記憶が正しければ、俺は向こうの世界で部活を終えた帰りに殺されたはずだ。部活帰りといったら、『腹減った早く晩飯が食いたいぜ！』の時間帯である。
よって、目覚めた時の俺は非常に空腹だった。
そして今、久方ぶりの食物を体内に取り込んだ俺は、急激に身体に力が入り始めていた。身体の奥底から、得体の知れないパワーが沸いてくるような感覚だ。
俺の血色が良くなったことがリコにも伝わったのか、リコは席に俺と向かい合わせになるように座った。
それから、視線をこちらに合わせる。
「では、話を始めましょうか」

「王剣……についてですか？」
「ん～、まずはそうしましょうか。では、アリス。これからする話をしっかりと聞いてください」
「もちろん。で、どうぞ」
リコは咳払いすると、俺の手に握られている剣を見つめ、
「まず、私はあなたに謝らなくてはいけません。嘘を吐いていたことを」
「え？　嘘……？」
「はい。私の本当の名前はリコリス・アルクトゥルス……、一応、アルクトゥルス王家の王女です」
「あ、なるほど。王女様ってこ――――、ってはぁあぁあああ！？」
素っ頓狂な悲鳴を上げた俺がとった行動は、額にぴっしりと地に付ける土下座の体勢だ。
「申し訳ありませんっ！！　俺、王女様に無礼な態度を！！」
そう、俺は今までこの少女にタメ口を使ったり……、あと興奮（性的な意味で）したりと、下手すると死刑級の無礼を働いてきた気がする。
「い、いえ。わたしが明かさなかったのも悪いわけですし、あくまで王女というのも一応ですから」
「死刑は勘弁してください」
「も、もちろんです」
「あと打ち首獄門なんてのも……」
「そ、そんなことしませんからっ！！」
打ち首獄門が通じたのはなんとも謎だが。
とにかく、俺が殺される危険はなさそうだ。
それよりも、一方的に会話を切ってしまった事の方が問題か。
「じゃあ、続きをお願いできる？」
「分かりました。まず、アリスが言ったとおり、王剣についてお話しますね。王剣アルファセウスとは、アルクトゥルス王国を建国した祖である、放浪の騎士レイヴィンの所持していた聖装です」

「王国の祖……建国者ってことだよね。それが持っていた剣だから王剣アルファセウス？」
「その通りです」
わざわざ詳しく説明するまでもない単純明快なお話だ。
よく俺の世界にある神話で、アーサー王伝説というものがあるが、似たようなものなのだろう。違うのは、魔法や伝説の生物がいるこの世界では神話としてではなく、実際の歴史として語り継がれている点だろう。
「遥か昔……、この地は一人の支配者に下に纏まるということは無く、各地に村や町があり、それぞれが自治を行い治めていました。アルクトゥルス王国の首都スペルシアも、昔は小さな町でした。シーズンになると隊商や行商の通り道だったこともあって、そこそこ賑わう平和な町だったそうです。そこにひとつの大きな災厄が訪れました。もともと、スペルシアの周辺は竜の住処だったのです。その竜の中でも特に凶暴で巨大な悪竜王と呼ばれる一匹が町を襲いました。悪竜王は竜軍を引き連れ、家畜を食い荒らして畑を焼きました。もちろん、自分たちの大事な町を荒らされた住民は黙っていませんでした。農民は農具を武器にし、町人は弓をとり、騎士たちは剣を取り、悪竜王とその手下に戦いを挑みました」
リコは言葉を切った。
それから俺に視線を移し、目で問いかける。
「負けたんですね」
「はい。所詮、人間の力では竜には及ばなかったのです。その敗北後、竜はひとつの要求をしてきました。それはもう町を襲わない代わりに、毎月一人の生贄を要求するというものです。当然、こんな無茶苦茶な条件を町の住民も飲むわけにはいきません。しかし、彼等にはもう残された道がありませんでした。仕方なく、悪竜王の申し出に応じ、最初の生贄は町を仕切っていた長の娘に決まりました。彼は責任を取りたかったのでしょう。町を竜に支配されるという最悪な結果を招いた自分の失態に対して。しかし、神は町を見捨てて

はいませんでした。もう、皆が諦めかけていた時、一人の騎士が現れました。その手には一本の剣。それこそが、王剣アルファセウスで、その人物こそが王国の祖、レイヴィン王です」

リコの話は続いた。

「悪竜王に単騎で戦いを挑んだレイヴィン王は、見事に悪竜王を打ち負かしました。そして、長の娘を無事、長へと返しました。それの偉業が認められ、レイヴィン王は町の長となったのです。更に、このレイヴィン王の偉業は、悪竜王を殺さなかったことです」

「殺さなかった？」

「ええ。レイヴィン王は、悪竜王とその手下の竜軍にこの地を守ってはくれないか、と懇願したのです。悪竜王は悪事を散々働いたにも関わらず、自分たちを殺さないレイヴィン王に感服し、その申し出を受け入れました。ここに、初めて異種族間での協力が実現したのです。その後、レイヴィン王は王剣と共に、周辺の村や町を纏め上げて、統一しました。そして遂にレイヴィン王は、王国を建国するに至ったのです」

リコは、ここで話を切った。

「これで、王国と王剣の関係についてはお分かりいただけましたか？」

「ああ。で、結局王剣はどうなったんだ？」

リコは俺に王剣の伝説を語った。

リコによれば、レイヴィン王の王国建国後、王剣は姿を消したらしい。理由は分からない。レイヴィン王曰く、「王剣は役割を終えた」と語ったらしい。レイヴィン王が晩年に綴った『王国記』には、王国が危機に陥ったとき、再び王剣は国王の前に現れると記されている。しかし、王がそのときに不在という可能性もないわけではない。もし、王が居なければ、代わりに王国を救う救世主が王剣を持って現れるとも記されている――、

「ちょっと待って！　それって今の王国はピンチってこと！？」

「ご名答」

あっさりと返されたが、割と一大事だ。
そして、今の話を聞いた以上、王国を救う救世主は……。
条件一、王国のピンチ。
条件二、王剣を持っている。
条件三、突然、現れる。
とっても適合している。そりゃあもう、恐ろしいぐらいに。
でも、まさか俺が救世主という訳ではないだろう。だって、俺はただの学生だった。特に訓練を積んだわけでもなく、特技はサッカーで親は二人とも健在。妹も一人居て、全く特徴のない普通の生活を送っていた。それなのに、いきなりこんな世界に飛ばされて……。
「それなのに……ッ！　まだ俺になにかやれっていうのか！！」
俺は思わず怒鳴ってしまっていた。
リコはビクッ！　と肩を震わせ、目を閉じてしまう。唐突に大声を出されて、驚かないほうがおかしいだろう。
俺は慌てて、リコの緊張を解すことを試みた。
「ご、ごめん。俺、思わず大きい声を出しちゃった。別に怒ったりしてないから、大丈夫」
リコは小さく頷いて、こちらを見た。
「貴方の詳しい状況は分かりません。でも、こちらの状況だけでも知って頂きたかったんです。王国は今、逆賊の手によって分裂しています。王国を治める王族も、王国を守るべき四公も今は…わたしは四公の一角を勤めていた父の無念を晴らすためにも……私、は……」
リコの瞳が揺れ、一滴の雫が零れ落ちる。
一方、俺はリコの言葉に疑問を感じていた。
「でも、リコはさっき王女って言ったよな。なのに父親がその……、四公とかいうのはどういうことだ？」
「それは、私が王家に養子として出されたからです。だから一応と言ったんです」
リコは涙を拭って、質問に答えてくれた。

それから、俺の顔をまっすぐに見つめた。俺には、彼女が何を言いたいのか、お見通しだった。だが、それは俺の望まないものだ。俺が望んだ話の結末は、決して俺の望んだものではなかった。

「お願いがあります。私が仮にもこの国の王女として、貴方に誠心誠意……、頭を下げてお願いをします」

やはり、そう来た。

分かってはいた。俺がどういう存在で、この世界に来たのか。

「どうか、どうかこの国を救ってください！！」

それは俺が産まれて初めて、人に頭を本気で下げられた瞬間で、俺が初めて人に頼られた瞬間だった。

5話　決断、そして（後書き）

究極の説明回です。次々回くらいからはゆるくなってくると思いますので、乞うご期待！！

6話　戦わない理由（前書き）

遅れてしまいましたが、無事投稿です。
少し悩んだ話でもあったのですが、お楽しみいただければ幸いです。

6話　戦わない理由

「無理だ」
俺はリコの渾身の願いを、その一言で一蹴した。
理論的に無理、なのではない。俺の感情論だ。
「な……っ……」
リコも絶句する。自分の全てを掛けた懇願を、願いをたった一言で断られたのだから、無理も無い
「一応、理由を聞かせてくださいますか？」
それでも、こうして俺に聞き返すことが出来たのは、王女としての精神力の強さが窺い知れる。ならば、ここは正直に自分の気持ちを伝えることが、今の自分に出来る最善策だ。
「俺は、戦いたくない」
「どうして！？　貴方は王剣を携えて、わたしの前に現れました！
貴方には、この王国を救うだけの力を持っているはずなんです！
じゃないと、可笑しいじゃないですか！！」
確かに、伝説ではそうなっているのかも知れない。
王剣を持って現れた人間が、王国の危機を救うと。
「でも、嫌だ。王国を救うってことは、俺が王国を危機に陥れた人間と戦わないと駄目ってことだろ？　俺は、殺し合いなんて嫌だ。俺が殺すのも、俺以外の誰かが殺しあうのだって……」
「じゃあ、わたしにこのまま目を瞑って見ていろと？　祖国が逆賊に蹂躙され、荒らされていくのを黙って見ていろと！？」
それは辛すぎるだろう。
俺はこの世界に来たばかりだから、情勢などは知らない。それが如何に複雑な問題なのかも、だ。
しかしリコは違う。
彼女はこの世界で生まれ、この世界だけを見て生きてきた筈だ。

そして、愛する祖国と常に共にあったはずだ。そんな心の拠り所も、肉親すらも失ったこの少女には、今の世界はどのように見えているのだろうか？

そんなことは想像できるはずが無い。

だって、俺は俺で、リコはリコだからだ。

お互いのことを『ある程度』知ることは出来ても、完全に理解することは出来ない。

だから、俺にはリコが抱える本当の苦悩など知る由も無いのだ。

それでも、

「――俺は、戦いたくないから。俺やリコが戦っても、問題は解決しないよ。だって、殺しあえば憎しみが増えるだけなんだから」

俺はリコの反応を待たずに、王剣アルファセウスに手を掛けた。

そして、その得物を静かに、そしてゆっくりとした緩慢な動作でリコの正面へと置いた。

「これは、返すよ。俺には必要のないものだから」

俺は機会を捨てた。

これが物語なら、俺は剣を取り、王国を救った英雄となるのだろう。神話で語り継がれてきた、数多の英雄。俺がその一人になれるような、恐らく元の世界では決して手に入らないような名誉と賞賛、そして富を勝ち取ることが出来たのかもしれない。

けど、俺はそんなことを望んでいたわけではなかった。

「俺は、この世界の人間じゃ、無いんだ」

だから。

自分が望んでいるものを本当に理解してもらうには、真実を曝け出すしか無かった。信じてもらえるなんて思ってもいないが、伝えることに損は無いはずだ。

現にリコは口を半開きにして、黙っている。

まるで、何か言葉を紡ごうと思っているのだが、肝心な言葉が出てこないような……。

「俺が正気じゃないと思うだろ？　思ってたっていい。でも、俺の

話だけは聞いてくれ」
俺は少しの間を空けて、続ける。
「俺はさ、本当の世界では一般人だったんだ。リコが考えてるような、英雄なんて夢のまた夢な感じで。特技も無いわけじゃなかったけど、そう特筆できるようなものでも無かったよ。でも、不満は無かった。だって、毎日友達と笑って過ごせるし、家族は全員仲が良くて元気だし。平和で良かった、って思ったよ。でも――――」
あの瞬間だけは思い出しくもないし、語りたくも無い。でも、事実だ。
鋭利な刃物が肉を押し分けて、めり込んでくるあの感覚。身体に傷こそ残ってはいないが、間違いなく心に傷が残っていた。刃物が怖いのだ。
「俺は殺された。何にも悪い事なんてしてないのにさ……。家に帰る途中で後ろからナイフで刺されたんだ」
俺は自分の手のひらを見つめた。
力を入れれば、確かに思うとおりに動く四肢。そして思考。
これは、本来なら永遠に失われていたはずのものなのだ。それでも、俺の身体がこうして存在していられる理由。それが、幸か不幸か異世界に転生してしまったからだ。
「だから、俺は折角神様から貰えた二度目の人生を無駄にしたくは無いんだ。出来るなら、平和に暮らして居たい――――」
君と、なんて気障（キザ）な言葉は紡げなかったが、俺は精一杯の思いを込めた――、つもりだ。

私は混乱していた。
膝の上にポタポタと落ちる雫が涙だと気づくのにも、少々の時間を要する。
（どうして……どうして……なんですか……？）
どうして、この少年の言葉はこんなにも心に突き刺さってくるの

だろうか。
肉親を、祖国を失ったあの日から、私はもう立ち止まらないと決めたのに。私の手で必ず、王国を取り戻してみせると誓ったのに。
それなのに……。
この少年が口にした言葉は、私の心を硬く覆っている――乾ききった泥のように汚く、薄汚れた復讐心の殻の隙間に入り込んでくる。そして、私の心の殻に次々と皹を入れていくのだ。
それは、自分のもっとも弱い部分を攻撃されているような、錯覚を覚えさせた。
そして、自分が今まで築き上げてきた『自身の人間像』が破壊されていく。
分かっていた。
自分が復讐などという、馬鹿げた理由を唯一の心の支えにしていたことが。でも、そうでもしなかったら、私は押しつぶされてしまっていただろう。押し寄せてくる遺恨の念で、とうの昔に自らの命を絶っていただろう。
それでも、今まで生きてこられたのは、復讐という目的があったからだ。
それは、肉親や大事な人を奪われたならば、当然のことであろう、とも思う。しかし、目の前の少年は違った。
アリスは一度たりとも、復讐などという言葉は出さなかった。自分を殺した憎むべき相手に対して、一切の私怨の感情を表さずにただ、新しい世界だけを見ていた。
思い知らされてしまった。
（私は……なんて小さい人間なの……）
真っ直ぐと前だけを見て突き進むこの少年と過去を引きずり、過ちを繰り返そうとする。器の大きさの差は明らかであった。
バラバラ、と。

私の心を覆っていた薄汚い殻は今度こそ、砕け散った。
もう、支えは無い。そう、かつての支えは無いのだ。
「ふ……ぇえええええん……えぐっ、っく……」
私は、崩れるしかなかった。

目の前で泣き崩れるリコ。
今度ばかりは、心情が痛いほど分かった。恐らく、リコは祖国や肉親の無念を晴らすことのみを支えにしてきたのだろう。そして、それが間違っていることを俺自身が説いた。
支えを失った少女の心は崩れるだけだ。
俺はそれを目の当たりにしている。だからこそ、出来ることがある。立ち上がり、ゆっくりと泣き続けるリコへと歩みを進め、

その肩に手を優しく置いて、

硬く……、強く……、抱き締めた。

もう大丈夫だよ、と。

そう語りかけ、少女は頷いた。
「リコはよく頑張った。凄いよ。こんなに追い詰められて、一人で戦ってきたんだから。だから、また立ち直れるはずだ」
リコは小さく頷く。
涙で潤む瞳を持ち上げ、俺へと視線を移す。これから、紡ぐであろう言葉は、俺に対するものであることが直感的に分かった。
「ひとつだけ……、ひとつだけ……お願いを聞いてくださいますか？」
頷く俺。戸惑いは無い。
「それが、リコ自身の本当の願いなら、ね」

今度は一際大きく、リコが頷いた。
「私と一緒に、ここに居てくれませんか？　ここで、暮らしたいんです。アリスと……。理由は分かりません。でも、アリスは私を変えてくれる気がするから……」
「お安い御用。俺も……その、これから宜しく。リコと一緒なら、きっと楽しいと思う」
その返答に、僅かながらリコの瞳に希望の色が浮かぶ。
「じゃあ……これからは家族ですね。こちらこそ宜しくお願いします。だから……今だけは甘えさせてください……」
再び、俺の胸で泣き始めるリコ。
俺も、そんなリコを抱き締める。
しっかりと、離さないように、優しく。

今まで、弱音を吐くことがなかったリコは、ようやく元のリコに戻れたのかもしれない。
悲しみを吐き出すことによって。
そして、これからは俺が支えていけばいい。俺が……。
と、

「リコお姉ちゃーん！　お薬貰いに来ちゃったよ～！！」

唐突に響いた可愛らしい幼年期であろう少女の声。
同時にリコの家の扉が勢いよく開け放たれ、茶色い髪の少女が入ってきた。
「リコお姉ちゃん、お爺ちゃんのお薬を……」
そこでお約束の絶句。
それも当然のことだろう。目の前には見知らぬ男と、その胸で泣く見知った少女。（これは少女視点で）
この場合、導き出される結論とは……。

「おとぉぉぉぉぉさぁぁぁあああん！！　お姉ちゃんが苛められてるぅ！！」

大絶叫。

「やっぱ、そうなるんかい！！」

というツッコミに反応してくれる心優しい救世主は存在せず。

少女の声に反応して、この家と村を結ぶ道からごつくて鎧を着込んだ男が走ってくるのが、見えた。その手にはしっかりと鉄槍が握られている。きっと、この村の衛兵なのだろう。

Q　あれ？　俺不審者じゃね？

A　誰がどう見ても、不審者です。

兎に角、修羅場が始まった。

6話　戦わない理由（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしてます。
誤字脱字報告などもどうぞ～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9304v/

剣と少年の異世界譚　～Sword is holy or evil～

2011年9月25日01時17分発行